

Book Review 15-26 時代小説 #天離り果つる国

『#天離り果つる国(上)(下)』（宮本昌孝著）を読んでみた。著者は手塚プロダクション勤務を経て、執筆活動に入る。2015年、『乱丸』で歴史時代作家クラブ賞作品賞を受賞。2021年、本書で「この時代小説がすごい！」2022年版の単行本部門で第一位を獲得。

「天離る（あまざかる）」とは、空遠く離れるという意味。枕詞を動詞化した語。「天」は都を指し、「離る」は遠く離れていることを意味する。都から遠い僻地を「天離る鄙（ひな）」と詠むなど、都への思慕を表現する言葉として使われた。

本書の主題は、僻地の弱小の国が存続するために強者とどう戦うかである。相手は織田信長、そして羽柴秀吉である。果たして、強者の意向に背いて生き残れるのか。私は札幌医科大学の弱小講座（地域医療総合医学講座）を20年間率いた。各地で総合診療科は儲からない・意味がないと言われお取り潰しに遭っていた（北大や京大等）。四面楚歌の中で講座を潰されないためにどう活動したらよいのか。本書を読むとそんな日々を思い出す。

舞台は、戦国期から織田～豊臣～江戸初期の、冬の半年間は雪に埋もれる飛騨白川郷である。そこに織田信長の侵略の手が迫るところから物語は始まる。なぜ都から離れた僻地を戦国武将の強者が欲しがするのか。それは金銀と、鉄炮火薬に欠かせない塩硝が豊富に産するからである。

その白川郷に天才軍師・竹中半兵衛の愛弟子・七龍太がかかわることになる。そして、“天空の城”と言われる帰雲城（かえりぐもじょう）には野性味あふれる紗雪姫がいた。その二人の若者の恋の成り行きを横糸（七龍太の出生の秘密が物語を大きく揺り動かす）に、白川郷の争奪戦が繰り広げられる。争いを複雑にするのは浄土真宗の勢力である（一向一揆）。白川郷を治める内ヶ嶋氏理は、領民の平和な生活を守るため、宗派と折り合いをつけながら信長や秀吉の命に反し、強者に干渉されない独立を目指す。果たして独立が得られるのか。

「さらさら越え」で有名な佐々成政の厳冬の立山連峰を踏破する描写もある。東日本大震災を超える大震災が物語の行方を左右する（この時代、秀吉が徳川征伐を断念した大地震、伏見城が崩落した慶長の大地震等、歴史を変えたかもしれない震災が頻発している）。